

## 千年王国の祝福(その一)



「狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。」(【新改訳 2017】イザヤ書 11:6)

### ベレーシート

●前回は、大患難の終わりにキリストが地上再臨された後で、この地上に実現する「千年王国」の必然性について取り上げました。もしあなたが、この「千年王国」にいないとすれば、あなたは救われていなかったということになります。イエシュアを信じて救われた者は、必ず、やがてこの千年王国において、キリストとともにこの地上にいるのです。しかも、朽ちないからだを与えられて、千年の間、この地上で生きることになるのです。ですから、「千年王国」について知っておく必要があるのです。

●「千年王国」ということばを、別のことばで言うと、「メシア王国」と言います。バプテスマのヨハネも、そしてイエシュアも、「悔い改めなさい。天の御国は近づいた。」と言うその「天の御国」のことです。その天の御国がどういう国であるかを神の御子イエシュアがこの世に来て、ことばを通して、また多くの奇蹟を通して示して下さったのです。その「天の御国」は、旧約の預言者たちが「その日(が来る)」という言い方で語っているのです。「千年王国」のことをメシア王国、神の国、天の御国、キングダム、神の支配とも言うことを頭に入れておきましょう。前回にもお話ししましたが、「千年王国」についての学びをすることによって、聖書が教えている数多くのピースがうまくつながり、ジグソーパズルとしての全体像がはっきりと見えてくるのです。旧約の歴史や預言者が語っていたことや、イエシュアがこの世にいられて語られた「御国の福音」の意味がより明確にされるはずで

●さて今回は、千年王国の祝福についての第一回目の学びです。やがて到来する天の御国の祝福がいかなるものか、その祝福のひとつの面をイザヤ書 11 章という窓から覗いてみたいと思います。結論を先に言うと、そのイザヤ書 11 章から見える千年王国の祝福の第一は、「**普遍的平和**」ということです。その祝福にやがて私たちは与ることになります。この祝福は私たちの希望(エルピス)です。使徒ペテロがこう述べています。

「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしておきなさい。」(【2017】Iペテロ 3:15)

このみことばが示していることは、第一に、私たちに与えられている「希望」を正しく理解しておくことです。第二は、その希望について説明を求める人がいたなら、いつでも答えられるようにしておくことです。しかも、柔らかな心で、恐れつつ、健全な良心をもって答えなさいとペテロは勧めています。

●早速、千年王国、メシア王国の祝福について預言されているイザヤ書 11 章を取り上げてみましょう。

【新改訳 2017】イザヤ書 11 章 1～9 節

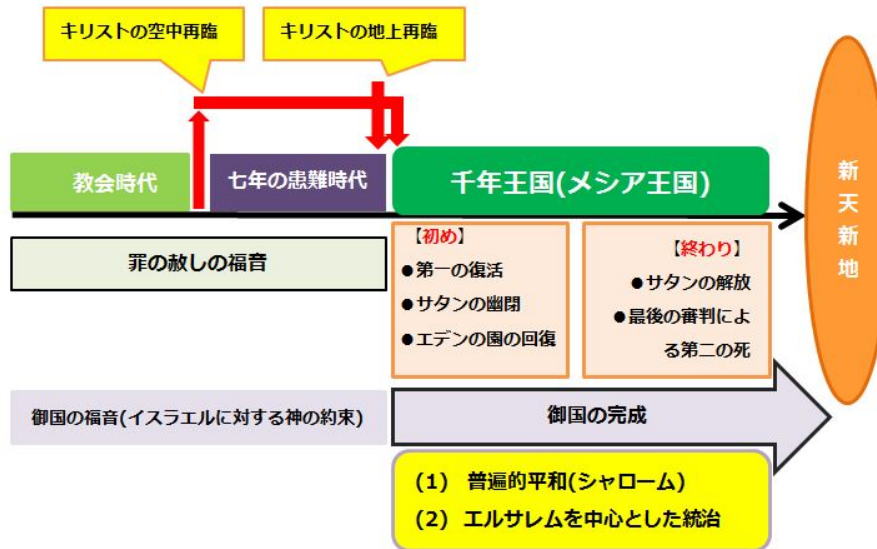
- 1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。
- 2 その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。
- 3 この方は【主】を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、  
その耳の聞くところによって判決を下さず、
- 4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。  
口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。
- 5 正義がその腰の帯となり、真実がその胸の帯となる。
- 6 狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、  
子牛、若獅子、肥えた家畜がともにて、小さな子どもがこれを追って行く。
- 7 雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。
- 8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子は、まむしの巣に手を伸ばす。
- 9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。  
【主】を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

●イザヤ書 11 章は大きく分けると二つ、その一つをさらに三つに分けると全体で四つのピース(ピクチャー)によって構成されています。今回のテーマである「**普遍的平和**」に限定するなら、6～16 節の部分がそれです。しかし 1～5 節の部分も取り上げたいと思います。

- (1) 1～5 節　メシアの来臨とその性格
- (2) 6～16 節　メシア王国における普遍的平和
  - ① 人間と自然界における平和 (6～9 節)
  - ② イスラエルと諸国民との平和 (10 節)
  - ③ エフライムとユダの平和—全イスラエルの回復と平和—(11～13 節)

## 1. 千年王国の王となるメシアの出处 (11:1～5)の預言

●今回の千年王国の祝福の一つである「**普遍的平和**」を考える上で、まず、その「普遍的平和」を実現してくださる王についての正しい理解が必要です。そこで、1～5 節に記されている「王であるメシアとその性格」について注目したいと思います。



### (1) エッセイの根株から

●1 節はメシアの出处についての預言です。「エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」とあります。冒頭にある「エッセイの根株」とは・・・讃美歌 96 番に「エッセイの根より、生い出でたる」という歌があります。クリスマスにしか歌うことのなかった歌ですが、私がクリスチャンになりたての頃、「エッセイ?」「何、それ」と思って歌っておりました。「エッセイ」とはダビデの父の名前だということが次第に分かってきましたが、「エッセイの根株から」という表現については分かりませんでした。なぜ、ダビデではなく、「エッセイ」なのでしょう。また、「エッセイの根株」とはどういうことでしょうか。こういう問いかけ(突っ込み)をしないと、分からない世界を何も知らずにただ歌っている、いや、歌わせられている、ということになります。ちなみに、原語は「エッセイ」ではなく、「イシャイ」(יִשָּׂי)です。

●ダビデといえば、イスラエルの歴史において黄金時代の礎を築いた王です。しかしそのダビデの出生は、とても貧しい所からだったのです。ダビデの父エッセイはベツレヘムに住んでいました。小さな町の貧しい家系でした。父「エッセイ」の名前の意味は、「主はおられる」という意味です。それはヘブル語の「イェーシュ・アドナイ」(יהוה אֲדֹנָי)から来ています。ヤコブが兄エサウの持つ長子の権利を騙して奪ったことから父イサクの家にいられなくなり、一人で叔父のラバンのもとに逃げたある夜に不思議な夢を見ます。夢から覚めたヤコブは「まことに【主】がこの場所におられるのに、私はそれを知らなかった」(新改訳 2017)と言って、恐れました。そのときのヤコブの言った「【主】がおられる」から「エッセイ」の名前が来ているのです。ダビデの父エッセイは、貧しいながらも、そこに「【主】がおられる」という意味合いが込められていたのです。

●その「エッセイの根株」とはどういうことでしょうか。木ではなく、根株とは、すでに木が根元から切られていることを意味しています。貧しいエッセイの木は子ダビデによって大きく成長しました。その木はひとたび神の栄光を表わした木なのですが、それが根元から切られる出来事が起こったのです。つまり、ダビデの王国が根元から切られる出来事といえば、バビロン捕囚の出来事です。国は亡び、神殿は完全に崩壊し、城壁も崩されました。根元から切られたのです。しかし根株は残っていました。その根株から新芽が生え、若枝が出

て再び実を結ぶという預言です。

●ちなみに、1 節は同義的並行法で書かれています。ですから、「新芽」と「若枝」とことばが異なりますが、意味としては同義です。つまり、「新芽」とか「若枝」というのはメシアを表わす象徴として使われていますが、それが「エッサイの根株」から出て来るのです。一旦切られた木の根株から新しい芽が出て、そこからメシアが登場してくるという預言なのです。それがイエシュアの来臨の預言となり、イエシュアがこの世に来られたことでその預言は成就したのです。しかしまだそのメシア王国は完全に成就してはいません。メシアの初臨によって幾分かは成就しましたが、その完成はメシアの再臨の時を待たなければなりません。イザヤ書 11 章には、メシアの来臨(初臨)とメシアの再臨によるメシア王国の成就とその祝福が、時間軸ではかなりの隔たりのある出来事が一枚の絵として描かれているのです。

## (2) 主を恐れることを喜びとするメシア

●エッサイの根株から出て来るメシアの特徴、あるいは性格を一言でまとめると、3 節に記されているように「この方は**主を恐れることを喜ぶ者**」だということです。「主を恐れることを喜ぶ」とはどういうことでしょうか。まず、「喜ぶ」と訳されたヘブル語を調べてみると、「ラーヴァハ」(לָוַחַ)の使役形が使われています。その意味は、第一義的に「においを嗅ぐ」という意味です。動物が獲物の匂いを嗅ぎ分けるという意味です。これは本能的な能力です。そこから派生して、主を恐れることを嗅ぎ分ける、主を恐れることを受け入れ、それを喜びとするという意味になります。それができるのは、2 節に記されているように、主の霊がとどまっているからです。その主の霊とは、「知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、主を恐れる、知識の知る知識の霊」であると説明されています。これらの霊によって、メシアは主のみこころを嗅ぎ分ける能力が与えられ、いつでもどこでも神を信頼して、神のみこころをなし、神を第一にしていくことができるのです。それが「主を恐れる」ということであり、そのことを喜びとしていく存在が「エッサイの根株から生えた新芽、若枝」であるメシアなのです。

●メシア王国(御国)の王とは、そのような神のみこころを嗅ぎ分ける霊的能力を与えられている存在なのです。しかもその方が王として統治されるときには、「正義」と「公正」、「正義」と「真実」によって統治されます(4～5 節)。ただしそれは、神の基準による「正義」「公正」「真実」であることは言うまでもありません。

## 2. 普遍的平和の祝福(11 章 6～9 節)

●メシアであるイエシュアがこの世に来られたときに、そのことを最初に知らされたのはベツレヘム近郊の羊飼いたちでした。天の御使いは彼らに現われて、次のように言いました。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つめます。それが、あなたがたのためのしるしです。」(新改訳 2017)。すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美しました(ルカ 2:13～14)。

「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」(天軍賛歌)

●この御使いたちの天軍賛歌は**預言的**です。というのは、この歌の内容はまだこの地上に成就していないからです。この歌がこの地上で成就するのは、再びメシアが再臨された後の千年王国においてです。千年王国においては、「地の上で、平和がみこころにかなう人々にある」ことが成就します。ここで「平和」と訳されたギリシア語は「エイレーネー」(εἰρήνη)ですが、ヘブル語は「シャーローム」(שלום)です。シャーロームとは、本来、神がこの世界を創造され、その創造の頂点として造られた人間との交わりの世界の祝福を表わす総称です。換言するならば、エデンの園の回復によってもたらされる祝福です。

●本来のエデンの園には、「死」というものは存在しませんでした。そのエデンの園が千年王国において回復するわけですから、基本的には「死」はないのです。「基本的に」というのは、少々説明しなければなりません。千年王国では古いものと新しいものとが入り混じっているのです。主にあるクリスチャンはすでに朽ちることのない体を与えられていますので、死ぬことは決してありませんが、千年王国では、その構成メンバーの中には新しい朽ちない復活の体を持たない者も存在しています。主を信じている者は死ぬことはありませんが、信じない者も時間が経てば起こってきます。そのような人は、百歳以上は生きられずに死んでしまいます。ですから、誕生して百歳になるまでが猶予期間です。それまでに王であるメシアを信じなければ、死に定められます(イザヤ 65:20)。

●人間の罪によって、「死」が人を支配するようになりました。その結果、死の恐れから自分の身を守るために、敵意が生まれ、争いや戦いをするようになりました。人間だけでなく、その死という束縛は被造物全体に広がり、弱肉強食の世界に変わったのです。人間が罪を犯すまでは、弱肉強食は存在しなかったのです。千年王国の到来は、そうした弱肉強食のない世界へと回復するのです。

●「**普遍的平和**」の実現と言ったのは、すべての領域においてシャーロームが回復するからです。神と人のかかわりにおいて、また人と人のかかわりにおいて、また人間と動物とのかかわりにおいて、また神の民と異邦人とのかかわりにおいて、また、神の民であるエフライム(北イスラエル)と南ユダとのかかわりにおいて、天と地のすべての領域において、神のシャーロームが回復する、そのことを指して、「**普遍的**」ということばを使っています。イザヤ書 11 章 6~9 節をもう一度、見てみましょう。

【新改訳 2017】

- 6 狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、  
子牛、若獅子、肥えた家畜がとみにいて、小さな子どもがこれを追って行く。
- 7 雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。
- 8 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巣に手を伸ばす。
- 9 わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。
- 【主】を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

●ここには、メシアの統治の結果もたらされる普遍的平和が詩的な表現で描かれています。

- ① 聖書では最も貪欲で残忍な動物として描かれている「狼」が、ここでは「子羊」とともに「宿る」とあります。「宿る」と訳された動詞は、「ともにえさを食べる」という意味です。千年王国時代はすべて草食です。
- ② 「豹」と「子やぎ」もともに伏しとあります。これも今の時代では、あり得ない光景です。
- ③ 子牛、若獅子(ライオン)、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。肥えた家畜は野獣の格好の餌食ですが、食われることはありません。子どもが彼らを従えている光景です。メシアがこの地上を支配すると、すべての敵意は止み、野獣はその凶暴性を失い、弱い動物は安全に生きられるようになります。人間と動物(獣と家畜)が共存するのです。「追う」と訳された原語は「導く」とも訳されます。つまり、人間が動物との関係において優位性を保っていることを示しています。

●7 節の「雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う」という表現も平和的共存を表わしています。ここで文字通りに解釈するなら、肉食動物が草食動物に変わるということです。エデンの園の状態に回復すると、こういうことになるということです。

●8 節の「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子は、まむしの巣に手を伸ばす」も大きな変化です。コブラやまむしと言えば、猛毒を持つ蛇です。ところが、それらに噛まれたとしても、全く無害の世界です。使徒パウロがローマへの旅の途中に難波して、マルタ島という所に漂着するのですが、そこで彼はまむしに噛まれます。結果は何の害もありませんでした。それを見ていた人々は彼を「神様だ」と言い出しました。マルコ福音書の最後に、イエシュアを信じる人々には次のようなしるしが伴うとしていくつかのしるしが挙げられていますが、その中に、「蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず」(2017)というくだりがあります。それは、やがて訪れる千年王国(メシア王国)の祝福の前味として先行的に経験される必要があったことを示しています。

●使徒パウロも人間と被造物の世界とのかかわりを、以下のように述べています。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 8 章 19~23 節

19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。

20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。

21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。

22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

23 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にいただくこと、すなわち、私たちのからだが生贖われるのを待ち望みながら、心の中でうめいています。

●人間のからだが生贖われるとき、つまり、朽ちないものに変えられるとき、そのような時代がくるとき、被造物全体が滅びの束縛から解放されるのです。そのために、弱肉強食による苦しみから解放されるのです。

## ベアハリート

●今回は、メシア(キリスト)の再臨によって、メシアの支配がこの地上に及ぶときの祝福の一つを学びました。イザヤ書 11 章ではイスラエルの民と異邦人との平和についても語っています。「全イスラエルの回復」等については、次回に学びたいと思います。

●今回はイザヤ書 11 章という一つの窓から、やがて地上に再臨されるメシアによってもたらされる「普遍的平和」という祝福の一つを学んだに過ぎません。旧約の預言書には、やがて起こることを告げている窓が数多くあるのです。それを見つけ、そこから学ぶことによって、知れば知るほど驚きの世界があることを気づかされるのです。私たちがこれから起こる神のご計画を正しく知り、そこに希望をもって日々歩むことが必要です。やがて起こることに目を留めて生きることは、この世の流れに流されないで生きる知恵と力を与えてくれます。それは、この世の毎日のニュースを数多く見聞きする以上にエキサイティングなことであり、かつ、価値あることではないでしょうか。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 12 章 2 節

この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。

そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。